

幕末維新における新朱王学の展開 (XV)

並木栗水及び楠本碩水・東沢瀉の史的地位

望月 高明

あらまし 『關邪小言』の成立は二百数十年の幕藩体制の崩壊のドラマが展開される前夜の、政治・文化・精神のクライメイトの変化を集中的に表現するものとして、象徴的な意味を不可避的に担わざるを得なかった。そして、このことは同書の成立した時期と深く関わっている。

『關邪小言』と訥庵の一連の上書類とを分ける標識は、その成立において浦賀の黒船の体験が直接関わっているか否かに存している。しかるに、ペリー後に一挙に激成せられた民族的危機は、時人をしてペリー来航前夜に成った『關邪小言』と、ペリー後に相次いで製作せられた上書類とを一系のものに見なすことを得しめた。本稿では続けて、横井小楠と並んで幕末期における最も卓越した思想家として位置付けられる佐久間象山の『關邪小言』に対する同時代人としてのほとんど酷評ともいべき応答を提示して、その含意するところを論じた。

十六 (承前)

以上がその問いの概略であるが、端山によれば朱子の「仁説」に徴すると、ある人が導来した叙上の帰結こそ正しく親疎厚薄の差等を立てず、自と他を無差別に混同する(認物為己)弊害と考えられるのであるが、訥庵の所論にはその解説に些か不十分な点があるのではないかと考えられた。ここで端山の疑義をめぐって『關邪小言』に直接就いてその起伏を検証することは小論の直接の課題ではない。われわれはひとまず右の端山の文が『關邪小言』の純粹に學術の象面に向けられているのを

確認すれば足りるのである。

なお、上述のことと関連してここで一つ補足しておきたいことがある。その一事とは、端山が同じ訥庵宛の書簡中において「但頃日仁体小悟仕候様相覚申候」(『朱子書』三七頁)と告白している事実である。因みに仁をテーマとするかかる基調の話柄がそれ以前にも存していることは、儒学の徒端山にとって仁が重要な地位を占めていたことを窺わせる。「端山自著年譜」によると、彼は江戸遊学中の嘉永五年(一八五三)、二十五歳の時に一夜静坐して「満腔子惻隱之心」の旨を悟ったことを告白している。「満腔子惻隱之心」とは周知のように程明道の語で、それは仁——天地の生意の内在を体する者の言葉に他ならない。なお、端山がこのことを直接の機縁として、従前の記誦文辭の因習を脱然と廃して性命の学に転ずるに至ったこと、また、その主著『学習録』(二卷)が書き始められたのもこの出来事を契機にしていることは既に指摘した。このように、この体験は端山の生の画期を成すものであったが、それは彼がいまだ訥庵の強力な磁場の圏内にあった頃の出来事であった。しかるに、上記「頃日仁体小悟云々」の告白は帰郷後の、離群索居を余儀なくせられていた時期のものである。端山は上の文に続けて、こう述べている。

以前ハ只愛之理・温和慈祥底之道理杯、只々口頭上ニ説至仕候述之事ニ而、一向自得と申処無之候処、先日周易復卦看至砌、於初九一陽來復之處、粗一見仕候様相覚申候。周易三百六十四爻始而此爻ニ仁字を説有之、尤深切易見処有之故歟。果而是愛之理所以惻隱者ニ間違

無之。……

その文面に徴すると、仁について従前の理解というのは浮浅で体認の功を欠いた未徹在なのを免れないとして痛切に自己反省が加えられるとともに、その理解に一進展があったことが報じられている。なお、ここで端山の右仁説に立ち入って論ずることはできないけれど、その理解が非常に透徹した洞見に富んだものであることは、ある程度までその文面が証している。端山の右の書簡は彼自身のそういう自覚の深化の過程を表している。私がここで主張しようとしているのは、端山において万物一体論をめぐる訥庵の所論に対する疑問というのは、それ自体において自己完結した閉じたものとは異なっており、一方ではそれと並行して仁体への一層の理解の深化という事態が進行していて、そういう脈絡の中から提出せられた問題であるということに他ならない。

以上、『關邪小言』の仁説に係る端山の疑問を取り来たって、その起伏の一斑を検証したのであるが、その文面は訥庵の「右は洋学弁駁之為二著述致候物ニハ候得共、學術之鄙見も約略吐露致置……」という定義を注意深く受け止め、その十全の意味において忠実に理解しようとしたものであることを窺わせる。端山にとって『關邪小言』は一義的に「西洋学御論破」(同上、三六頁)の述作に止どまらないで、彼をして「只今都下二而道德性命之学第一」(同上、五九頁)と言わしめた訥庵の朱子学者としての識見を盛り込んだ学術の書でもあった。右の端山の文はこのことを端的に証している¹⁾。

しかるに、『關邪小言』成立後の同時代のほとんどの読者(その書のヨーロッパ的なものをトータルに拒否して、伝統的所与を擁護する狂熱的な排外主義にいかれて、その主張を熱烈に支持する者と、それとは対蹠的にその所論をほとんど頑迷固陋な愚論として退け、激しく反発する者)とを(選ばず)が、前文と後文をつなぐ逆接的な表現を見過ごして、同書の異端排撃の象面だけをクローズアップさせる中で(もっとも、訥庵は端山宛の私信においてそういう事実を語つたに止どまって、その他の学人は知る由もなかったから、事情已むを得なかったといえればそれはそうかも知れぬ)、端山だけは訥庵の請を忠実に肯つて、冷静に同書の学

術面にも注意を怠らなかつた。かくして『關邪小言』については現在に至るまで従来の西洋学排撃の書という通行イメージに禍されてか、同書を訥庵の朱子学者としての力量が披瀝せられた学術の書として理解するということは、十分には試みられなかつたのではないだろうか。端山などによって折角そういう可能性の一斑が開かれようとしたにもかかわらず、同書のかかる象面というのは十分に展開せられることがなく中途で座礁してしまつた。

それにしても、訥庵の折角の注意にもかかわらず、『關邪小言』の性格規定をめぐる然く時人に「關異」の象面だけがクローズアップせられて、同書の学術に係る象面がほとんど撥無せられるに至つたのは、一体何故だろうか。このことを考える場合、同書の成立及びそれを取り巻く政治的状况というものを考慮の外においては、恐らくその答えを導き出すことは困難だと思われる。訥庵がこのことを意図したか否かはしばらく問わなければ、『關邪小言』の成立は二百数十年の幕藩体制の崩壊のドラマが展開される前夜の、政治・文化・精神のクライマイトの變化(政治的状况、思想の風潮、精神の移り変わり)を集中的に表現するものとして、象徴的な意味を不可避的に担わざるを得なかつた。そして、かかる点は同書の顕著な特徴として、攘夷を主題とする他の類書とは決定的に異なっている。ここで再び前出の訥庵の宮川加兵衛宛の書簡を登場させることとしよう。その文面は訥庵にとつても『關邪小言』の成立というのが上述のごときドラマティックな現実を予告するものとして、ある種の運命的な意味を担うものであつたことを物語っている。すなわち、

但一片之慷慨心は父祖より伝来仕候て、乍不及常々節義磨励之筋を心掛罷在候処、近年洋学流行、神州之元氣を損傷致候を憤激之余り、自己之固陋をも不顧、關邪小言草定仕候。折柄癸丑之六月夷舶渡来、愈神州之浮沈此時と存候て、草莽微賤之身を忘れ兩度迄上書仕候事二御坐候。(『大橋訥菴書翰集』)

劈頭の「一片の慷慨心は父祖より伝来せられたもの……」という文については、小論の主題を解くキーセンテンスとして、後に改めてその含蓄

するところが主眼的に検討されるであろう。曩に指摘したごとく、『關邪小言』が成つたのは同序によると嘉永五年（一八五二）九月である。

そして、訥庵が同書を脱稿したわずか九ヶ月後にはペリー率いるアメリカ艦隊（言わずもがなのことではあるが、艦隊とは二隻以上の複数の軍艦（複数の軍艦である）で編成した部隊の謂である）が来航したのだった。（私はこれまで『關邪小言』の成立時期を同書に附載する「關邪小言序」の年次に徴して、素朴に「嘉永五年倉龍壬子重陽後二日」と理解していた。しかし、事情は些か異なるらしい。寺田剛氏は『關邪小言』の成立について、右の年次は単にその序文の脱稿の日を示すにすぎず、同書の本文の執筆はそれ以後のことだと推測している。もし然りとすれば、『關邪小言』の完成とペリー来航との時間的な隔たりはほとんど極小なものになる。強大な軍事力を誇る異国船の圧倒的なさまじいまでの威容は、ブルジョワ文明とパワーポリティクスを象徴するものとして、その集中的な表現であった。訥庵は右『關邪小言』において繰り返し西夷がわが国に対し侵略の機会を覗っていることを警告している。彼にかかる西洋夷狄觀を抜き難く植えつけた直接の機縁が、一八四〇年に惹起したアヘン戦争による清国の敗戦であったことはほとんど疑えない。（このことについて、例えば宮城公子氏はその「誠意のゆくえ——大橋訥庵と幕末儒学」（『幕末期の思想と習俗』所収）において、『關邪小言』の当面のモチーフは、アヘン戦争における清国の敗戦を契機に、とみに声高になつた洋学者の洋式軍備採用を強調する海防論に對抗することにある」と述べている。『關邪小言』の当面のモチーフをめぐる右の宮城氏の言説と、私のようにアヘン戦争を直接その機縁とする所論とでは微妙な点において、しかしその解釈には大きな逕庭が存している）。であるから、彼は右の書において一再ならずアヘン戦争のことに関説して、西洋夷狄のリアルな実像というのがそのイデオロギー的粉飾を剥ぎ取つて最も基礎的な物理的次元にまで下っていくと、ほとんど権力意志むき出しのブルータルなものであることを暴露しようとして努めている。次の文もそういう脈絡において理解せられるであろう。

……醜虜ノ他国ヲ蚕食スルハ、此術（西洋詭秘ノ術を指す）ヲ用ヒズ

ト云コトナシ。或ハ祇教ヲモテ眩惑シ、或ハ新關ノ説ヲ誇耀シ、或ハ奇巧ノ器物ヲ伝ヘテ、陰ニ其人心ヲ感服セシメ、次第ニ根柢ニ揺動ヲ付ケテ、暴風迅雨ノ機会ヲ待ツハ、彼ガ奸謀ノ秘訣ナルニ、清人眼孔小ニシテ、其隠衷ヲ曉ルコト能ハズ。折角祇教ヲ嚴禁シテ、前門ノ狼ヲバ禦キタレトモ、ウカ／＼洋貨ヲ天下ニ弘メ、其説マデヲ貴重シテ、後門ノ虎ヲ進メシカバ、ヤガテ盤根ニ虫ツキテ、鴉片ノ暴風興ルニ及テ、終ニ彼レヲニ倒サレタル也。カ、レバ滿清ノ敗績ハ、兵ヲ交ユルノ日ニ当テ、驟ニ起レルコトニハアラデ、年久ク醜虜ノ術中ニ陥リ、漸々ニ彼ガ毒ヲ受テ、民心ヲ移サレタルニ由レルナレバ、是ゾ洋学ヲ嚴制スベキ、第一ノ鑑ニ非ズヤ。（『關邪小言』一）

儒学の徒訥庵においても、当時あらゆる道は依然として「中国」に通じていると信じられていた。しかるに、聖人の国として聖化せられた中国は、アヘン戦争（一八四〇〇四二）によって西夷の前に敢えなくも敗北を喫するに至つた。右の文において、彼の史眼は直接には過去（過去といつても、アヘン戦争の終結した十年ほど以前）に向けられているけれど、その実践的意図は現在から未来への企画が、過去の史実そのものの核心に滲透している。今や訥庵にとつて喫緊の課題とは、わが神州が清国と同じ轍を踏まないためにはいかにすべきかということにあった。ここでは清朝の敗北というドラスティックな出来事は、自己の現実を映し出す教訓とかがみ（鑑）に例えられている。そして、同書の脱稿とほとんど前後してアヘン戦争の知識を通じて想像し畏怖していたものが、今や厳然たる事実として強固な意志を持って来航したのだった。この偶然的符合には訥庵ならずとも一種の運命的なものを感得したとしても不思議はない。『關邪小言』はこのようにその成立からしてドラマティックなまでに時機相応な書であった。右の宮川加兵衛宛の書簡で「近年洋学流行、神州之元氣を損傷致候を憤激之余り、自己の固陋をも不顧、關邪小言草定仕候」とその執筆動機を語つた訥庵が、続けて「折柄癸丑之六月夷船渡来……」と述べている件りは、彼自身がこのことを強く自覚していたことを示唆している。（私は初め幕府有司はオランダ商館長キユルシスを介して一年前からペリーの江戸湾への来航を把握し

ていたから、もしかすると訥庵も何らかの機会にそういう情報に接していたのではないかと考えた。もつとも、このことは幕府の最高機密に属し、幕府有司の首脳だけが知っていたに止どまったというから、処士訥庵がそういう情報を得る可能性は低かったのではないだろうか。上來、一再ならず指摘したごとく、訥庵によれば『關邪小言』はどこまでも「洋学弁駁之為ニ著述致候物ニハ候得共、學術之鄙見も約略吐露致置候」ところの、關異と學術の二つの要素を兼ね備えたものであった。そして、この定義はそれ以上のものでも、それ以下のものでもない、端的にそういうものに他ならなかった。しかし、このように『關邪小言』はその成立からしてドラマティックなまでに時機相応タイムリな書であったことから、時代の熱狂も手伝って同書の學術に係る象面は余り時人の注意を惹かずにはほとんど撥無せられ、關異Ⅱ西洋学排撃の象面のみが一義的に拡大視して喧伝せられるに至ったことは否み難い。こうして『關邪小言』Ⅱ西洋学排撃の書という通行イメージ（通り相場）が漸次醗酵し形成せられるに至ったと考えられる。

なお、この話にはまだ続きがある。宮川加兵衛宛の書簡において、訥庵はペリー来航を機縁として「愈神州之浮沈此時と存候て、草莽微賤之身を忘れ」、二度にわたって幕府有司に建白書を上呈したことを語っている。その二文が、一は「嘉永上書」（原名は「浦賀表御防禦之義二付今日之急務愚存之趣奉申上候書取」）、一は「鄰疝臆議」を指していることは固よりである。右の二文については既に小論（Ⅻ）で関説しているのでここでは繰り返さない。ところで、「嘉永上書」はペリーが来航したわずか二ヶ月後の嘉永六年八月に成立を見、また「鄰疝臆議」はその年次に徴すると同年の十月に脱稿せられた。そして、この場合重要なことは右の二つの述作がともにペリー後に製作せられたことである。『關邪小言』と右二文とを判然と分ける標識は、その成立において浦賀の黒船の体験が直接関わっているか否かにある。アヘン戦争の知識を通じて想像し畏怖していたものが、いまだ想像の段階に止どまるか、それとも目の当たりの現実となるかの相違である。両者はペリー来航をいわば分水嶺にして、その成立がそれ以前と以後とに画然と区別せられる。『關

邪小言』と右二文とはこの点において大きく異なっている。両者の間には質的な断層が介在している。「嘉永上書」及び「鄰疝臆議」がペリー後（心理的にはこの時期ほどわが国が外国勢力の侵略を受けるかも知れないという危機意識が一挙に激成せられたことはなかった）に製作せられた述作である以上、それが一義的に「關異」を主題としていることは容易に首肯し得るであろう。（かかる消息は「嘉永上書」の原名からも如実に観取することができる）。換言すれば右の二文は『關邪小言』が本来有している二の要素のうち、學術に係る象面を切り離して「關異」の象面を継承し、一層尖锐化して発展させたものに他ならない。ペリー来航後の状況の急激な変化に応じて、訥庵は右上書の外に嘉永六年十一月には『元寇紀略』二巻を、また翌安政元年二月には、同年一月のペリー再来航に伴って「安政上書」（原名は「異国船渡来之儀二付又々愚存奉申上候書取」と立て続けに同系統の述作を製作している。その場合、右一系の著述が直接關異を主題とする、即今の焦眉の危機的課題に対する何らかの処方箋（処方箋といっても、その実践的意図というのは皮相な技術的末梢的な次元に向いてはおらず、飽くまで「国家の敵」として鋭く相對峙する外夷防禦のための具体的方策、並びにその前提としての根本基址たる心術の確立の急務なることが開陳せられている）としての地歩を担っていることは明らかである。訥庵が「嘉永上書」及び「鄰疝臆議」の執筆動機に触れて、「折柄癸丑之六月夷舶渡来、愈神州之浮沈此時と存候て、草莽微賤之身を忘れ……」と述べる件りには、ペリー来航を直接の機縁として一挙に激成せられた状況化に対する危機意識が横溢している。そして、その主調意識はその後の政治的状況の急激な進行に伴い漸を追うて尖锐化してその後の述作に深化発展せられている。

かくしてペリー後に一挙に激成せられた政治的危機的状況は、時人をしてペリー来航前夜に成った『關邪小言』と、ペリー後に相次いで製作せられた訥庵の上書類とを一系のもものと見なすことを得しめた。時人はペリー後に製作せられた、時間的には後行の述作を介して、その傾向・基調意識から遡って時間的には先行する『關邪小言』の性格規定を行っ

た。事態かくのごときであるから、學術に係る象面がすっぱり脱け落ち、同書が一義的に西洋学排撃の書と見なされるのは、蓋し当然の勢である。かくして『關邪小言』は關異の書という通行イメージが漸次形成せられるに至った。そして、恐らくその固定した通行イメージは現在に至るまでわれわれを暗暗裡に支配して、われわれはその規定から決して自由ではない。

なお、以下に述べることは私の単なる覚え書にすぎず組織的な叙述ではないが、例えば後に横井小楠（一八〇九〜一八六九）と並んでわが国の疾風怒濤の時代にあつて伝統的世界像を内在的に転換させることに最も成功した、幕末期における最も卓越した思想家として位置付けられる前記佐久間象山²⁾の『關邪小言』に対する同時代人としてのほとんど酷評ともいべき応答などは、予め識を成すものとして冥冥の裡にそういう趨勢を準備したと考えられないであろうか。その言説は幕末維新の思想史過程において最も影響力を持った思想家のそれだけに、暗暗裡に同書の辿ったその後の運命を暗示している。その言説とは象山が親友の山寺源太夫に宛てた書簡の一節である。すなわち、

然ば關邪小言二、三の卷御惠示、難有奉存候。可成丈早読返上仕候様、敬諾仕候。第二本颯と一涉。其愚論に耐へかね々々御返し申上候。

少々読書も候もの、箇様の愚に成り候と申も解すべからず候。駁正の事も過日被仰下候に付、手間費の段申上候所、尚又此題目にては駁正もなくて叶まじく思召候旨被仰下候へども、豆蔵の市頭に於ていか様の事多弁に申候へばとて、士大夫たるもの夫と弁論は致し申まじく候。愚見如此に候故、此輩何を申候はむとも聊か構不申。唯氣の毒なるものと存じ候までに御座候。（『象山全集』五）

その文面からも容易に観取し得るごとく、山寺源太夫から借用した『關邪小言』の第二本（第二卷）をざつと涉獵した象山は（その文を額面通り受け取ると、象山は『關邪小言』（四卷四冊）を網羅的ではなく、わずかにその第二本のみを、しかも熟読玩味したのではなくざつと通読したにすぎない。このように言ったからといって、私は彼の読書態度を取り来たつて軽率だなどと非難しているのではない。ただ事実を語つて

いるにすぎない。たとえその書を忽々と読過しても炯眼でもって直下にその要領を洞観し得る者もいれば、それとは対蹠的に仮にその書を丹念に読んでも茫然として不得要領なのを免れない、凡庸な読者がいることを、われわれは事実として承認しなければならぬ）、友人の強い慫慂もあつて一旦は同書駁正のための文を執筆することを約束したのであるが、その頑迷固陋な愚論に我慢がならず駁論するにも足りないほとんど一筆に勾下している。右象山の『關邪小言』に対する批判、わけても同書の卷二のコメントが具体的に特定の箇所を指して言ったものなのか、あるいは卷二の全体の印象を指して言ったものなのか、これだけでは必ずしも判然としない。試みにここで些か想像を逞しくして述べると、象山などの開かれた柔軟な精神から見るとき、例えば同書の次の言説などはいかにも頑迷固陋な儒学の徒の妄論として映ったのではないだろうか。

然ルニ近世西洋ノ説ヲ奉スル輩、聖学緊要ノ名ヲ竊ミテ、自カラ窮理学ト号称シ、天地万物ノ理ハ、西洋人コソ窮ハメタレナド、忌憚モナク唱フル程ニ、世ノ眼アリテ眸子ナキ者、実ニ然リト誤リ信シテ、今ハ窮理ト称スレバ、洋学ノ事トナレルガ如キハ、破天開荒ノ怪事ト云ベシ。是ハ国家ノ上ニ喻ヘバ、奸猾不測ノ老賊アリテ、紛ラハシキ国璽ヲ偽造シ、ソラ庸人ニ誇リ示シテ、太祖ノ正統ナリト唱ヘ、兇徒ヲ嘯聚スルガ如シ。（『關邪小言』二）

象山は朱子学の徒としてその立場を固守しながら、しかもその「格物致知」説を彼の時代の中で考え得る限り最大限に拡張して解釈し、西洋の自然科学を基礎とする諸成果をもその中に包摂して、その積極的な撰取に道を開いたといわれる。そして、彼が幕末期における諸他のイデオログに比して傑出した存在としてわが国の近世思想史上に位置付けられるのも、係つてかかる象面に求められる。その象山からすると、訥庵の立場、学問態度というのはそういうモメントを原理的に欠いて、旧来の儒教的なカテゴリーの解釈に齷齪して陳套を一步も出でない教条主義と観じられたのではないだろうか。殊に訥庵と象山の両者は形式的には、その傾向や学問態度はともに著しく主知的・概念的であること、ま

た朱子学者としてその学問は居敬の功夫においてよりは格物窮理の功夫において際立った特徴を有するという共通点をもっていることを考えるとき、この対蹠性は甚だ興味深い。右の象山の『關邪小言』に対する態度、その文面は紛れもなく二つの極端の中の一方を指している。(これと対極のもう一つの極端というのは、例えば余りに自己の主体性を尊んだ結果、『關邪小言』の狂熱的な排外主義にいかれてその「信者」になつた者などを指す)。ここで再び『關邪小言』に対する象山の批判の文を列挙してみよう。すなわち、「其愚論に耐へかね勿々御返し申候」、「少々読書も候もの、箇様の愚に成り候と申も解すべからず候」、「駁正の事も……豆蔵の市頭に於ていか様の事多弁に申候へばとて、士大夫たる者夫と弁論は致し申まじく候」、「此輩何を申候はむとも聊か構不申。唯気の毒なる者と存候までに御座候」。これらの批判の言説は『關邪小言』に対する象山の構え、あるいは問題視角をある意味において非常に尖鋭的な形で表示している。彼の批判というのは、最初から『關邪小言』と四つに組んで主題的に組上に載せることを放棄して、徹頭徹尾黙殺してかかる底の突き放した態度である。『關邪小言』の史的評価の定まった後世から遡及して象山の批判を顧みたとき、それはある意味においてオールオアナッシング＝一切か無かという寸毫も妥協の余地のない鋭角的な、ほとんど問答無用底の破壊的な否定であった。

なお、文中の「豆蔵」という語には、(1)手品や曲芸をし、滑稽な身振や口上で人を笑わせて銭を乞うた大道芸人、(2)おしゃべりな人を罵っている語、(3)きわめて背の低い者、小人、(4)釣合い人形、その他(『日本国語大辞典』18、「まめぞう」(豆蔵)条)の意味があるが、文脈から推して恐らく象山は(2)の意味で用いているのではないかと思われる。例えば二百有余年続いた幕府の鎖国政策に対する象山の「……始終御鎖国にては御国力御伎倆共竟に外国に劣らせられ、終に御鎖国も遂げさせられざるに至り可申。是本邦当今の御形勢に馴致候を以ても明に知らるべき義に御座候」(『象山全集』二)という言説は、彼がペリー後の「天下騷擾にて世態一変」した幕末の状況に対していかに冷徹な認識を有していたかを如実に物語っている。その文面は、充分な国力と技量の裏付けを

欠いた現下の状況においては、鎖国政策の維持によっては鎖国という肝心の目的さえも遂行不可能ということである。そして、象山のこの推測がいかに正鵠を射た透徹したものであったかは、ペリー後に継起した歴史的事象が一々そのことを証している。現下の状況に対してかかる醒めた認識を有する象山にとつて、自己と全く価値体系と伝統を異にするヨーロッパ的なものをトータルに拒否して、自足的な体系を固守する『關邪小言』の主張が、いたずらに長広舌をふるう単なる妄論として映じるのに不思議はあるまい。しかし、(1)(3)及び(4)も相応に含みがあつて捨て難く、そういう意味に解することも可能だと思われる。『關邪小言』の現行の思誠塾蔵版が刊行せられたのは安政四年(一八五七)春夏の頃といわれるが、「一旦本書が世に出るや、人々争い求め、天下の紙価を高からしめ、普く海内に拡まり、幾多の志士を奮起せしめた」(『大橋訥菴先生伝』)。事実、その消息の一斑は例えば前記宮川加兵衛(越後高田藩士)のように『關邪小言』、その他の述作を読んで義氣を作興せしめられた諸国の未知の「同志之知己」(訥庵の語)に宛てた訥庵の書簡類を繕けば容易に窺い知ることができる。かかる事実を徴すると、(1)はペリー来航を機縁として「内患外憂一時二勃発」(同上)した幕府倒壊直前の時代の熱狂も手伝って、『關邪小言』の盛行とともに俄然として時代の寵児として時めいている訥庵を、醒めた眼でもってほとんど時代のピエロとして戯画化したものと解することができるであろう。次に(3)はこのままでは文意が通じ難いかも知れぬ。(3)の意味の可能性を必ずしも排除しなかつたのは、実は訥庵の身体的特徴に関して碩水がある事実を報じているからに他ならない。後に彼はかつて江戸遊学中に接した佐藤一斎門下の学者数人の月旦評を残しているが、例えば訥庵については次のごとく評している。

陣太刀拵ノ佩刀デ三斎羽織ニ自在袴デ、ハデナ様子ハ大橋訥庵デアツタゾ。サレドモ丈ノ卑ク近眼デアツタカラ、威望ハマンザラナカツタゾ。三斎羽織ニ自在袴ハ、一斎ガ用ヒラレタモノゾ。(『過庭余聞』)

幕末の一時期を除いて、徳川封建社会の二百六十年にわたる時代は大きな争乱や革命的動乱から免がれて比較的泰平の状態が維持された。劈頭

の文について、既にそういうことが常識ではなくなった現代に生きるわれわれには具体的なイメージを抱くことさえ困難であるのだが、訥庵の「陣太刀拵の佩刀デ三斎羽織ニ自在袴」という宛ら戦時を思わせるその出で立ちは、幕末の時代にあっても一種異形な風采であったことを窺わせる。もっとも、碩水の伝えるところでは、訥庵は派手な衣装を身に纏っていかにも目立つ存在であったが、背丈が低く近眼であったため押し出しは余りよくなかったらしい。象山は訥庵の背丈が低いことを知っていて（象山と訥庵の両者は従学時期はそれぞれ異なるけれど、ともに一斎門下の高足として多少の交流はあったらしい）、意図的に訥庵の身体的特徴を取り来たって明らかに然く形容したのではないかと思われる。次に(4)については、ひとまずこれをヘーゲルの歴史哲学の用語「理性の狡智」を援用することによって解釈が可能なのではないかと思う。果たして象山が幕末の思想的状況に対してそういう洞察を有していたか否かは詳らかにしないけれど、ペリー後の社会過程、諸々のイデオロギーの氾濫——鎖国論・攘夷論・和親論の消極積極様々のニュアンス、更にそれと尊王論・敬幕論・公武合体論・倒幕論などの絡み合いの様相——というのは、一つのアナロジとして絶対的な理性に操られた人形たち（尊王攘夷運動を担った歴史上の諸個人）の所行として理解することができであろう。幕末期の思想家・実践家たちは各自の特殊の関心や欲求、激情を歴史の舞台で思い思い自由に展開させるが、その帰結というのは理性自身の普遍的な目的を実現する過程に他ならない。その場合、絶対的な理性の目的というのが、象山においては歴史の必然性として「東洋道德・西洋芸術」という標語に象徴されるところの開国政策であることは改めて言を待たない。なお、(4)に係る以上の叙述は試論的なノートにすぎず、固より精緻なものではない。

以上、象山が訥庵を形容するのに用いた「豆蔵」という言葉を取り来たって、その含意するところの幾つかについて検討したのであるが、(1)と(3)はどちらの意味に解しても、ヨーロッパ的なものをトータルに拒否して声高に鬨異を呼号する『鬨邪小言』の頑迷固陋な愚論にほとほと呆れ返った象山が、訥庵という人物を意図的に矮小化し戯画化している

感は覆い難い。その場合、象山が『鬨邪小言』を取り来たってその愚論に我慢がならず駁論に値しないとほとんど一筆に勾下しているのが、同書に係る訥庵の規定の中、「鬨異」の象面に限られていることは恐らく疑えない。（私は『鬨邪小言』の評価・性格規定をめぐる、このように「鬨異」と學術の両者を截然と分けて弁証することに問題が存しないのではないことはよく承知している。このことに伏在する問題については、すぐ後で指摘する）。上来も少しく触れたように、象山の『鬨邪小言』に対する批判というのは自ずと別のところにある。アヘン戦争において聖人の国である清国がイギリスに敗退したというドラスティクな現実を衝撃を受けた象山が、この出来事を機縁にして漸を追うて洋学への理解を深めていって伝統的な夷狄観を克服し、「東洋道德、西洋芸術」という西洋文化の受容論理を準備するに至ったことは、既に周知の事実に属する。かかる開明的な精神の持ち主が訥庵に代表される自己と全く価値体系と伝統を異にする「西洋」をトータルに拒否して伝統的所与を擁護する古典的攘夷論を、「愚論に耐へかね」てほとんど問答無用底に一刀両断に附するのは蓋し当然であろう。再び繰り返すが、右の象山の『鬨邪小言』に対する論評というのは、直接には同書の「鬨異」の象面——ヨーロッパ的なものをトータルに否定する狂熱的排外主義の必然的帰結としての絶対的鎖国論——に向けられたものであって、学術面に向けられたものとは考え難い。

しからば、小論が象山について然く推測する論拠は那辺に存するのであるか。象山が山寺源太夫から借りて「颯と一渉」したところの『鬨邪小言』第二本は、「論西洋不知窮理」、「論西洋不知天」の二篇から構成されている。そして、右二篇（あるいは卷三の「論西洋不知仁義」を加えると三篇）などは、ひとまず同書の中でも最も學術の象面に関説しているというのがわれわれの結論であった。私は曩に小論（XV）において右三篇を取り来たって、それらの諸篇が「論西洋不知……」という表題からも容易に観取せられることとく、ひとまず、洋学弁駁のための衣装を纏っていて、それだけにかかる象面において甚だ旗幟を鮮明にしていること、そして、『鬨邪小言』が時人の熱狂的な支持を受けて歓迎せられ

た所以が、係って同書の「關異」の象面に存していることを指摘した。

(一方、象山の位相に即して言えば、『關邪小言』が頑迷固陋な妄論として、ほとんど無価値・無意義なものとして一刀の下に両断せられる所^も、また係って同書のかかる象面に存していた)。それに続けて、「しかるに、右の三篇に立ち入って検討を加えるところは些か異なっている。われわれは訥庵が洋学弁駁のための基礎づけ、あるいはその前提として程朱の窮理に格物致知説、仁義説、あるいは漢民族伝来の天の觀念について周到かつ明晰な解明を加えて、その原旨を闡明ならしめる努力を怠っていないのを見出すであろう」と述べた。実を言うと同書のかかる象面については象山といえども一言半句も言い得ていないのである。

その意味では象山もまた『關邪小言』に係る訥庵の規定の前文と後文をつなぐ逆接的な表現に躓いて、一義的に同書の「關異」の象面をクロージアップさせて理解したことは否み難い。(上来も少しく指摘したことく、そもそも象山には『關邪小言』を全体にわたって熟読玩味して理解しようとした痕跡は見出し難く、そこにあるのはそういう態度の断念に他ならない)。恐らく象山の上記『關邪小言』に対するかかる基調の論評は、彼が小楠と並んで幕末期における最も傑出した思想家としてその史的地位が漸を追うて確立せられていくのに伴って、その後の同書の性格規定及びその辿る運命をほとんど決定的に左右したのではないかと思われる。かくして『關邪小言』を取り来たって、一義的にそれを「關異」の書と観する趨勢が漸次的に醸成せられるに至った。そして、現在のわれわれもその固定した通行イメージから決して自由ではない。

上来、『關邪小言』の評価、その性格規定をめぐって、同書の「關異」の象面だけがクロージアップせられるに至ったと言ったが、嘉永六年のアメリカ艦隊の来航から、慶応三年の幕府の倒壊、そして明治維新に至る社会・政治過程というのは、『關邪小言』のその後の運命を左右する決定的な意味を担うものであった。丸山真男氏はその論文「開国」において、閉じた社会を典型的に表現するものとして「古典的」攘夷論(敬慕たると倒幕たるとを問わず)を取り上げ、「もし」と仮定して次のように予想している。

ラディカルな攘夷論が、もし、ひたすら兀進し、外人襲撃・公使館焼打・外国戦艦への砲撃等々の行動が、もし、激発の一途を辿ったとしたならば、幕末日本の国際的運命は現実にあつた姿とは著しく変わっていたであろうと思われる。(『忠誠と叛逆』)

しかし、その後のわが国の歴史の進行は必ずしもそういう過程を辿らなかった。アヘン戦争、続いてペリー来航の衝撃を媒介として賦活せられた尊皇攘夷運動は一時的には華々しく昂揚するものの、その趨勢は文久三年(一八六三)をピークとして漸次的に後退していつて、「東洋道徳、西洋技術」という指導理念に象徴されるところの西洋文化を積極的に受容する開国派が勝利を獲得していく過程であつた。その場合、上来指摘したごとく『關邪小言』が一義的に「關異」を呼号する攘夷論のバブルとして位置付けられる限り、攘夷論の漸次的な退潮(後退から敗退へ)とともににはや時代の要求に応ずることのできぬ歴史的に破産したものととして、忘れ去らるべき運命にある思想であることは自ずから明らかであろう。殊に歴史の判決が衰えるものと盛えるものをきっぱりと区別した後代から考えれば、時代から置いてきぼりを食って歴史的使命を終えた思想作品として、同書の価値や意義などは精々攘夷論の古典的文獻の一としての地位しか与えられていないのではないだろうか。

なお、ここで補足として一つのことを指摘しておくこととしよう。上来、私は『關邪小言』の性格規定をめぐって、ひとまず、同書の關異Ⅱ異端排撃に係る象面と純粹に學術に係る象面の二つを截然と区別して論じてきた。このことは右の書が一義的に西洋学弁駁の書という規定によって覆うことのできない、訥庵の朱子学理解をある程度組織的に論じたところの優れて學術の書であるとする小論の立場から自ずと導き出された帰結といつてよい。そして、その一の根柢が、訥庵自身が同書に与えた「右は洋学弁駁之為ニ著述致候物ニハ候得共、學術之鄙見も略略吐露致置候」という定義に由来していることは、上述の通りである。しかしそれにもかかわらず、彼の次の言説はそういう事柄を分けて考える傾向に対して異を唱え、かかる傾向がけつきよく「支離破碎」という事態を結果することに警鐘を鳴らしている。訥庵のこの指摘はやはり注目に値

するものであろう。

……兎角見之不徹学者ハ性理之外ニ事業アリ、事業之外ニ性理アリと存候様ニ相成候事通弊にて、春日（潜庵）¹ 抔も天稟高く候とも取ニ不足者ニ御坐候。是皆宋賢所謂究理之功無之より其知不明して、右様支離破碎ニ相成申候。²（『大橋訥菴書翰集』楠本確藏宛自筆書翰）

右の文中にその名が出てるように、その言説は直接には、春日潜庵の生と学を批判する中で主張せられたものに他ならない。周知のごとく潜庵もまた、江戸時代を通じて逼塞を余儀なくせられていた朝廷がペリー来航を機縁として政治的主体として幕末の政治史に漸次登場する過程で、内は主人久我建通を輔佐して朝廷の枢機に参画し、外は天下の志士と謀議して復古の事業を画策し、遂に安政五年（一八五八）十二月に幽囚されるという経歴を有する。ペリー来航を機縁として醸成せられた状況化に対する危機意識から政治的傾斜を加速させていったという、その生が優れて政治性を帯びているという点において、潜庵もまた訥庵と同タイプの人間類型に属している。その訥庵にして、しかも潜庵に対してかかる言説が存するという点にここでは注目したいのである。その場合、訥庵の潜庵に対する批判が果たして妥当性を有しているかについてはひとまず問題ではない。むしろ、ここでは直接には否定的な言辞を伴った形で（すぐ後で述べるごとく、潜庵においては本来一つながりの脈絡の下においてあるものが判然と二つに分離して跛行状態に陥っていることが厳しく告発されている）、本来性理の外に事業はなく、事業の外に性理はないとして、性理と功業との一致（端山の言説を借りて表現すれば、学と政の一致——『朱子書』三三三頁）を飽くまで主張していることが重要である。訥庵においても政治的功業というのほどきまで性理の学基礎付けられ、その自然性の発露として成立すべきものであって、そうではなく性理の学を疎外して政治的功業それ自体を目的的に標榜することは、けつきよく根柢を欠いた功業優先の一片の功利心（この語は訥庵が上掲の端山宛の書簡のすぐ前で、潜庵のことを「是も近來少々久我殿之家政を執候として、最早性理、学を迂として、功利腸ニ移り候様子」と論評しているのを踏まえる）に墮するものと断ぜられた。このこ

とはやがて迫切せる危機意識に迫られて急激に政治的傾斜を加速させていった訥庵が、後にその一連の行為を講友の秋陽、その他からかつて彼が潜庵に放ったのと同じ基調の言をもつてして批難を被らねばならなかった事実を徴すると、いかにもアイロニカルなものに響く。何となれば、性理と事業の一致を強く自負し公然と主張していた訥庵の行為も、秋陽その他からすれば判然と内実と外観に相反的な関係が認められると観ぜられたから。些か文脈を逸れたので主題に立ち返らう。訥庵によれば、潜庵において性理の学と政治的功業とが然く判然と異別せられるに至った所以は、係って『大学』の格物致知ニ窮理の功夫を欠いていることに由来すると考えられた。（この場合、『大学』の格物窮理の功夫を欠くことが、何故に「性理之外ニ事業アリ、事業之外ニ性理アリ」とする支離破碎という事態を結果するのが明らかにされなければならないのは固よりである。それとともに、ここでは朱子学の「格物致知」説が潜庵の奉ずる陽明学説に対抗する思想的武器として、一の特色を有するものとして位置付けられていることにも注意を要する）。事態かくのごときであるとすると、『關邪小言』の評価、性格規定をめぐって、事情已むを得ぬとはいえ小論のように「關異」ニ異端排撃の象面と學術の象面とを二分して解釈することは、けつきよく根柢的なものを遊離して本質を見失うという一種の形式主義に墮する底の弊害を免れないかも知れない。

十七

このようにして、訥庵において『關邪小言』はいかにも西洋学の洪害ある所以を弁駁するために製作せられた述作であったけれど、儒者としての本領に係る学事に関する自己の識見も大略披瀝したところの學術の書でもあった。なお、このことに関連して曩に小論（XV）において結論を先取りする形で、『關邪小言』に開陳せられている朱子の教説に係る學術上の識見などは、ひとまず訥庵の朱子学者としての力量、その朱子学理解の透徹の程を窺うに足るものがあること、何より訥庵晩年の思想

の到達点は同書によって判定せられねばならないと述べたことを想起しよう。右の結論は私の独断なのは固よりない。例えばこういう口吻は既に『關邪小言』の史的位置付けを試みた栗水の言説などに隠然として伏在している（後述することく、彼にとつて同書は非常に思い入れの深い述作であった）。私のしたことといえ、ただそういう傾向を顕在化させて表現に上せたというにすぎない。この問題を考える場合、栗水が訥庵の「与人論陸王書」（『大橋訥庵全集』中）を取り来たつて種々論じ来たつた後、その後序において「然らば則ち先師の定説に非」ず（その他、これに類する表現として同序中の「伏して読むこと再三、然る後是れ先師初年の見なるを知るのみ。後來の定説に非ざるなり」というのを参照）と断じて、続けて『観省録』と『關邪小言』の二著に關説している件りは、われわれの上来の結論を側面から補強するものである。この場合、直接には否定的言辭を伴つてではあるが、彼の「先師の定説」（あるいは「後來の定説」という表現は、訥庵の学問の性格規定に係る重大な意義を担っている。しかし、ほとんど断片的な文を提示しただけでは脈絡が必ずしも判然としないので、以下に關連する文を引用することとしよう。

然らば則ち先師の定説に非ざるや明らかなり。昔正韶將に師門を辭して歸らんとす。因りて先師嘗て著す所の観省録を贍写せんことを請う。先師許さずして曰く、観省録の成る、予之を一斎藤子に質す。藤子嗟稱す。然れども今見る所頗る變ずれば、他日の訂正を待ちて然る後可なり、と。先師をして猶お存しむれば、此の書も亦た必ず訂正に在らん。關邪小言は則ち晩年の著作にして、専ら程朱の説に拠りて、以て異言を排す。以て先師學術の純正を觀るべし。（訥庵先師論陸王書後序）

右の文において注目すべきは、同じく訥庵の述作であるにもかかわらず、高弟の栗水において『観省録』と『關邪小言』とは、その評価・位置付けが判然と異なっていることである。七年にわたる從学を終えて師門を辭する栗水が『観省録』二卷の筆写を請うたところ、訥庵は意外にも許諾を与えなかった。そして、その主たる要因が一時も同一の宗旨

に止どまり得なかつた訥庵に相応しく、係つて彼自身の学説上の變遷の一事に歸せられてゐることは、いかにも同書の過渡的性格というものを物語つてゐる。また、栗水において然く右二編の評価・位置付けが判然と異なるのも、その要因は係つて訥庵の學の変遷という事態に応じて自ずと生じたその書の成立の早晚というタイムラグに求められてゐる。

上来も一再ならず指摘したことであるが、その生涯において訥庵の奉ずる學の宗旨が變遷したことについては、栗水もまたその事實を指摘してゐる。すなわち、「蓋し先師の學屢しば變ず。初め陽明を學び、又た禪理を窮め、最後は朱子に歸す」（同上）。その場合、栗水は師の學問遍歴をこう叙述した後、訥庵の次の言説を提示するのを忘れなかつた。「其の言に曰く、學は須らく日に新たなるべし。始終一説を守る者は、其の識長進せざればなり」。因みにこの結論の文、あるいはその結着の付け方というのは、一見何ら異とするに足らぬ陳腐な表現で、訥庵が無造作に言つた言葉だと思ふかも知れない。しかし、それはそうではない。実は學問におけるかかる基調意識こそ、訥庵から栗水へと相承せられたところの一の鉄案であつた。

『観省録』は弘化三年（一八四六）ごろ、訥庵の三十二、三歳頃に成つた最初の纏つた述作である。訥庵の思想がその形成過程を完了し自らを展開し終わったところから遡つてその生の全過程を顧みたとき、『観省録』の時代といふのは彼にとつてもいまだ一斎陽明學の強力な羈絆の直中であつた頃の、その思想の過渡期であつたと考えられる。右の書において訥庵は學問の帰趨するところを孔孟の正學を得た朱子學に定位して、その集大成者たる朱子を敬仰するのは固よりであるが、遡つてその源流として朱子學を準備した周濂溪・張横渠・二程等北宋諸儒の教説に對しても深い理解を示している。それとともに他方では陸象山・陳白沙・王陽明などの、理よりも一層高次の實在として一心を措定し、そこに人間存在の存立根拠を求めようとする心學を標榜する思想家に對し其感を覚えて、その教説に深くコミットメントしてゐる。例えば訥庵は『観省録』において、近時、正學をもって名のある儒先が陽明を誹謗することが朱子を尊ぶ道だと心得る傾向に強い不満を漏らしてゐる。そも

そも朱子を尊ぶにはそれに相応しいやり方があるはず。例えば朱子の学が主敬を主にしていれば、実実に敬を主とし、朱子の学が窮理を主としていけば、実々に理を窮め、朱子の学が力行を主としていけば、実々に力行する。これこそが朱子を尊ぶ正道であり、また朱子を尊ぶ実事に他ならない。その言に続けて訥庵は「致良知」という陽明学の眼目ともいべき根本語を説明して、この三字は『大学』の明明徳、『中庸』の致中和と同旨であつて、正しく朱子の学問の二端を成している居敬と窮理の旨と血脈相通するものであると論じている。そして、以下にあげるのはその理由を述べた文に他ならない。

蓋し良知を致すに非ざれば、窮理主敬力行皆な属する所無し。而して窮理主敬力行を外にしては、良知も亦た致す所無し。此れ文成の学、既に朱子の窮理主敬の旨と背違せず。即ち朱子の立宗の旨、亦た豈に良知を致すと反せんや。(『観省録』上)

右の文において注意を要するのは、訥庵が朱子の学問の枢軸を成す居敬窮理と、同じく陽明学の血脈骨髓ともいべき「致良知」とを同じ血脈のものとして一味において捉え、朱子と陽明という中国近世を代表する二つの精神を媒介し主体的に統一せしめて、一層高次の場を開こうと試みていることである。ひとまず『観省録』の基調に徴していえば、その脈絡は宛然と朱王一致を標榜する習合折衷の風であることは疑えない。(右のごとく言つても、それはその理想型を述べたというに止どまり、事実としてそういう習合折衷の立場が朱王の精神を媒介して、両々相待って一層高次の立場を開くことが可能であるか否かは自ら別の問題である)。

注

(1) 訥庵は『關邪小言』の性格規定を行った右端山宛の書簡の末尾で、「拙著の後の二巻はもはや上梓の時機もありそうもございませぬが、その成否にかかわらず、臭味同好の人の跋語を欲しく思い申し上げます」と述べた後、続けて端山に「万一鄙論之趣二御異存も無之候

ハ、乍御面倒跋文一篇御認被下候事ハ相成申間敷哉。御知己之事故聊申試候也」と依頼している。こうして懇切なる依頼を受けて成ったのが、現行の思誠塾蔵版に附載せられている端山撰の「關邪小言跋」である。それだけに、右跋文には訥庵がその書に下した定義の二の象面が反映せられていることが当然予想される。事実、「關邪小言跋」を注意深く読み進めると、端山は『關邪小言』が西洋邪説のわが正道を害するのを憤って著された關邪の書であることを首肯しながら、一方ではその基礎付け、あるいは前提として周到に程朱学の教理にわたった學術の書であることに関説するのを怠っていない。例えばその消息の一斑は右の文などにおいても観取することができるであろう。

抑そも先生(訥庵のこと)の論ずる所を觀るに、吾が学が正理の在る所を揭示すれば、則ち確實精当なること、大陽出でて百怪遁るるが如きなり。洋学が邪毒の伏する所を抉発すれば、則ち明快的覈なること、荊棘撥かれて大道通ずるが如きなり。(『關邪小言跋』)

(2) 横井小楠と並んで佐久間象山が幕末期における諸他の思想家に比して傑出した存在として、わが国の近世思想史上に位置付けられる場合、その理由が那邊に存しているかが明らかにせられなければならないのは固よりである。なお、ここではこういうラディカルな問いを設定して、この問いに主題的に答えている(と私には思われる)植手通有氏の文を参考として示すこととする。

幕末思想史において象山の思想が注目される点は、彼が西洋の衝撃をたんに国家社会体制の危機として受取るだけでなく、同時にそれを自己の信ずる儒教にたいする一つの思想的挑戦として受止め、儒教の再解釈によってこの挑戦に応えようとしたことにある。

この点では、象山の思考態度は次節で取上げる横井小楠と——この挑戦をいかに受止め、儒教をいかに解釈しなおすかという面では異なるが——共通性を持ち、水戸学派や大橋訥庵と明かに対立する。後者のように危機を国家の危機としてのみ受取る立場では、たとえ実用的な採長補短はなされうるとしても、思想を創造的に発展させる可能性は閉ざされている。象山や小楠のように思想の次元において問

題を捉える場合に、はじめて思想を内から変革していくことが可能となるであろう。(『日本近代思想の形成』所収「幕末における近代思想の胎動」。その他、同書所収の「佐久間象山における儒学・武士精神・洋学」にも纏った叙述がある)

なお、私が然く植手氏の文を引用したのは、必ずしもその主張を全面的に首肯しているからなのではない。些か潜越な物言いではあるが、私はこの問題について植手氏のアプローチの仕方(殊に訥庵の史的位位置付けについて)とは異なった別の方法が存するのではないかと考えている。

(3) 私はこれまで思想家という言葉を非常に曖昧に無造作に使用してきたが、この「思想家」という言葉をもって象山の生と学を規定することにについては、例えば植手氏の次の文を参照せられたい。

もつとも、激動期ともいふべき当時においては、「思想家」と「実践家」とがほとんど分化していない。むしろそうした分化を否定することこそが、ここに取上げる人々に共通した態度であったとすらいいうる。概して彼らの発言はいちじるしく状況的・断片的であり、一部の人々の場合には、著書といえるようなものがなく、建白書や書簡、さらには他人が書きとめた談話筆記などが、利用できる主要な史料となる。(同上)

(4) ここに注目すべきは訥庵が初期の最も纏った著述『観省録』において、既に「余嘗て怪しむ、理学・気節一事なり。而るに世毎に之を二にす」と疑問を呈し、これと同じ基調の問題を提起して一つの思惟モデルを示し、事柄を分けて考える傾向に対しその難点を犀利に剔抉して注意を怠っていないことである。殊にその文は比較的纏った委曲を尽くしたもので、彼の理解を原型的に示して、この問題について考えようとする者にとって有力な手掛かりを与える。なお、その文は長文のためここではその結論の部分を用用するに止どめる。詳細は読者自ら就いて見られたい。

夫れ気節にして理学に本づかざれば、縦い名譽起見の爲めに非ざるも、亦た豈に能く大中至正の帰に底らんや。且つ其の忠孝節義、理

を離れて更に是れ何物ぞや。其の勢、人をして学問を視て贅疣と爲し、而して君父を以て沽名の具と爲さしむるに至らざるは已まず。

是れを其の標に驚せて其の根を窮めずと謂う。理学にして気節に足らざれば、空言無実論無く、且つ其の所謂理なる者、用何れの処にか在る。所謂学なる者、果して何事をか習う。而して所謂存心養性なる者、忠孝節義礼義廉耻を外にして、抑そも又た何れの処にか其の能く躬行実践を見んや。其の勢、人をして異端の倫物を遺棄するの学、俗儒の口耳聞見の習に入らしむるに至らざれば已まず。是れを其の名を眩まして未だ其の実を既くさずと謂う。(『観省録』下)

(5) 注(5)は行論上やや長大にわたるため、紙幅の制約から掲載することができない。

(6) 因みに栗水は後に碩水宛の書簡で、彼が思誠塾在塾中に筆録した訥庵の著書の名をあげている。

僕在塾中写録スルモノハ、周易私断一冊。其後追々録シテ三冊トナル。性理私説一冊、歳在龍集考一冊、隣疇臆議一冊ノミ。隣疇臆議ハ人ノ持去ル所トナリテ今亡セリ。闢邪小言・元寇紀略ハ、僕在塾中成リタルモノ也。(『朱子書』四二七頁)

栗水の「大橋義三方へモ一泊致シ、先師ノ論格致贖議ノ書一部ヲ乞得タリ。此書ハ姚江ヲ以テ姚江ヲ論ズルモノニシテ、朱学ヲ以テ姚江ヲ論ズルニ非ズ。先師ノ学果シテ如此ナラバ、僕輩尽ク遵奉スル能ハザル也。……」(同上、四五五頁)という言説が雄弁に物語っているごとく、彼は訥庵が陸王の学から朱子学へと転じた後の及門の弟子であった。であるから、栗水が在塾中に筆録した述作も、必然的に訥庵の晩年のものに限られる。

所属 都城工業高等専門学校 一般科目文科

(平成二十九年九月二十九日受理)